

教会月報

No.534 (2023年6月25日)
【2023年7月号】
日本キリスト教団埼玉和光教会
〒351-0114 和光市本町 15-50

『祈り』

岩河敏宏

聖書：ルカによる福音書 11章1節～3節【新改訳】

1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」² そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。』³ 私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。(下線部：著者)

ルカ福音書の特徴の一つとして、「祈るイエス」の姿を他の福音書よりも強く印象付けています(3章21節、5章16節、6章12節、9章18節、28節、11章1節)。また、「終わると」の語も主語(イエス)に特別な関心を向けさせるギリシア語文法上の工夫がされています。ルカは読者に対し、主の祈りを弟子たちに教える場面の最初に、祈りに専心しているイエスとその生き方に目を向けさせる意図を感じます。

故に弟子たちは、イエスが祈っておられる姿を見て思わず引き込まれ、「祈りを教えてください」と願うのです。その彼らに、イエスは「父よ」で始まる主の祈りを教えます。総ての命の創造主であり救いへと導く神に対し、「父よ(お父さん=アッバ)」という日常語で祈る

ことは驚きでした。しかし、イエスは神から「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」(3章22節)と言われたことを全面的に信頼し、「～して下さい」式の祈りではなく深い霊的な交わりの中に身を置いていたからこそ、祈りの第一声に「父よ」と言えたのです。だとするならば、私たちも主の祈りで「父よ」と祈る時に、イエスとの繋がりの中で神の実存と働き(救い)を具体的に意識するよう促されていると言えます。

「日ごとの糧」の「糧」は、ギリシア語の「パン」です。「日ごと」は、常になくってはならない不可欠な、という意味です。すると、『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と言われたイエスの言葉に繋がります。日ごと霊的な糧を得なければ、生きることも、また使命を果たすこともできないことを示しています。よってルカは、主の祈りに続けて、自分のところに夜訪ねて来た友人のために、すでに寝ている別の友人の所へ行きパンを三つ執拗に願う譬え(5節～8節)と「求めなさい。そうすれば～。門をたたきなさい。そうすれば～」(9節～10節)との勧めを置き、段落の締めくくりに「自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(13節)を置くことで、私たちが神の実存に信頼して「父よ」祈る時、生きるのに必要な“霊”が備えられることを、心に留めたい。